

土佐のわらべ

第413号《第435回（2016. 3. 10） 子どもの本の読書会記録》参加者5人・文書参加3人

『みどりのゆび』

モーリス・ドリュオン/作 安東 次男/訳 岩波書店

今回初めてこの本を読んだ感想といたしましては、「きれい」「怖い」「難しい」というものでした。後半2つに関しては、裏表紙あらすじ説明に「チトってだれだったのでしょうか？」とあるように、チトの正体がわかる衝撃の終わり方がわたしの中で色濃く残ったからなのでしょう。今回の参加者の中でも、納得した方、もやもやした方、読む人で終わりの受け止め方が違います。

大金持ちの商人のもとに生まれた、かわいらしい男の子チトは本当に特別な子ども。その心は純粹そのもので、その親指は触れた所どんな場所でも花を咲かせる「みどりのゆび」です。その指を使って、刑務所や病院、貧乏な人々が暮らす街を花いっぱいにするのです。そして、戦争まで止めてしまうのです。

あらすじだけ見ると、とても道徳的なにおいがします。でも、このおはなしの楽しむべきところはそこではないのです。あとがきに、フランス童話の持つ特徴の一つとして、こんなことが書かれています。「おはなしの、筋よりもきめのこまかさ、詩的なふんいきやことばのおもしろさを、たいせつにすることです。そしてそれらをうまく使って、まるで宝石のような、うつくしい文章をつくりだすのです。」と。わたしが最初に読んで、ぼんやりと感じた「きれい」というのはこのことなのでしょう。ぼんやりとしか感じられなかったのは、ストーリーだけをただただ追っていたから。しかし、2度目を読むと、行間や描写された風景を楽しむことができました。

最後に、読書会で出た感想を一部ご紹介します。

- ・『星の王子様』を思い出すような雰囲気、文章。
- ・挿絵がきれい。物語の場面を想像できるような絵で、繊細な雰囲気に合っていて良かった。
- ・チトが親指で周りを幸せにし、周りも本人も満足している様子がとても印象的で、こちら心も満たされた。
- ・「死」を描いているのも良かった。戦争で死ぬ、というのは普通ではないのだと。特別な死に方なのだわかる。
- ・なんで子どものころに読んでなかったか、惜しいことをした。子どものころと大人になってからは読み方が違う。もっと違う読み方が出来ただろう。
- ・子どもを描いていながら、周りの大人の考えもしっかり描いている。
- ・子どもが大人になれない話、いや、子どもが大人にならない話だと思う。
- ・この本を読むとなぜ泣けるのか。それは私が子どものころの私自身に罪悪感を持っているから。あの頃疑問に思ったことで解決してないことはある。だけど今は何も思わない。そこに罪悪感を覚えているのだと。

チトと周りの大人がよく描かれている本。子どものころ、そして大人になってから…読む人の立場が変わればまた違った感想を持つことができるこの本を、また読んでみたいと思います。

(K.W)